第７回　府立高校の在り方ビジョン（仮称）検討会議　（概要）

１　日　　時

令和３年11月22日（月）午後３時～５時

２　場　　所

京都産業大学むすびわざ館　３－Ａ（３階）

３　出 席 者

〇委　　員　８名（欠席２名）

〇教育委員会　橋本教育長、木上教育次長、山本教育監、大路管理部長、吉村指導部長、相馬高校改革推進室長、石澤総務企画課長、平野管理課長、村田高校教育課長、山田特別支援教育課長、坂田高校改革推進室参事　ほか

４　概　　要

〇事務局からの資料説明

〇協議

◆：座長　　〇：委員　　□：教育委員会

■事務局からの資料説明

■協議（主な意見）

◆資料２「府立高校の在り方ビジョン（仮称）【中間案】（素案）」について、御意見をいただきたい。

〇【はじめに】府立高校生対象にアンケートを実施した旨も、この中で触れるべきではないか。またその際、実施期間等の情報を記載することも必要ではないか。

〇【はじめに】いかに柔らかく教育を作っていくかという視点が大事である。「大人がスーツケースにならない、子どもを風呂敷で包み込んでいこうという教育が、これからの時代にふさわしい」という話を聞いた。子どもたちは多様であるということをしっかりと受け止めていき、目指すべき着地点を考えていく必要があると感じている。振興プランの施策推進の共通の視点に「多様な子どもたち一人一人を大切にし、誰一人取り残すことなく個性や能力を最大限伸ばす教育」とある。子どもたちは多様であると理解し、共に生きるといった視点から物事を捉え直して、共生社会に向けたシフトチェンジというようなことが伝わる在り方ビジョンになればよいと感じている。

◆【はじめに】前提が弱い感じがする。振興プランによる理念などをもっと打ち出してはどうか。

○【第１部　４】定時制・通信制課程の状況、特別支援教育の状況ということについては書かれているが、不登校の児童生徒が増加していることも大変大きな課題であり、先日文部科学省から公表された「児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果」などについても、言及してはどうか。

○【第２部】アンケート結果では「在籍している府立高校に改善してほしいこと」の第３位は「校則」であった。校則にはさまざまな背景や事情があることは理解しているが、生徒が 18 歳で高校を卒業し社会に出ていくにあたって、自己理解や自己責任について、校則を通じて自分たち自身で考えさせることも必要なのではないかと思う。校則のことに触れるのは難しいかもしれないが、そういった観点についても盛り込んでいく方がよいと感じた。

○【第２部　Ⅰ】アンケート結果のことだけが書かれているような印象である。「はじめに」のところで「第２期京都府教育振興プラン」に触れているとはいうものの、「基本的な考え方」においても、振興プランに沿って計画を策定していくこと、振興プランに示されている京都府の教育の基本理念、施策推進の視点等を記載した方がよいのではないか。

○【第２部　Ⅰ】この中でアンケートについての説明があり、「参考資料」として後ろに結果の概要がつけてあるが、重要なものについては本編の中に貼り付けた方がわかりやすいのではないか。構成について少し考えてみてはどうか。

◆【第２部　Ⅰ】振興プランが「あるべき姿」で、アンケート結果は「現状」である。そのギャップを今回解決しようということである。在籍校に満足している生徒が多かったではなく、14％の不満足の生徒がいるとも言える。満足する要因は「部活」や「学校行事」であり、「授業」など学校の本業の部分が弱かったということにもなる。アンケートに対する基本的なスタンスでは、良かった内容にとどまらず、「そこそこ良かったが、まだまだ解決すべき課題があることが分かった」として、検討を進める方がよいと思う。

◆【第２部　Ⅰ】府立だけでなく、公立・私立が一体となって、京都府の高校生を育てていこうという視点があってもよいのではないか。私学に対する言及が少ない印象である。私学の比率が高いというのは京都府の大きな特徴であるが、これを前提として、協調して切磋琢磨しながら特色を出し、多様なニーズに応えていくという前向きな姿勢が盛り込まれるとよい。

○【第２部　Ⅱ】京都府については、南部と北部とで地域の状況がかなり異なっている。京都府立高校を取り巻く地域事情の違いについても、記載した方がよいと思う。丹後地域においては、少子化の状況下で、地域における高校の役割等を踏まえて学舎制を導入している。そのような実績や成果についても、考え方といったことも含めて、具体的に触れてはどうか。

○【第２部　Ⅱ】府立高校に通う生徒たちの満足度が高く、良いところもたくさんあり、部活動や学校行事など、生徒たちは意欲を持って取り組んでいる。改善した方がよいことや課題について整理されているが、実際に学校生活を送っている生徒たちの思いを踏まえて、今後も大事

にしよう、良いところを伸ばそうといった趣旨の記載があってもよいのではないかと思った。

○【第２部 Ⅱ】新学習指導要領が、中学校では今年度から全面実施され、高等学校では来年度からという状況にある。予測困難な時代を生き抜いていく力をつけるために、中学校教育と高校教育とがつながっていくという連続性がもう少し強調されてもよいのではないか。中高連携の強化についての記載があるが、中学校も高校も同じ方向を目指してるということもアピールできればよいと思う。中学校で全面実施となっている新学習指導要領での評価が、高校にどのように引き継がれていくのかといった道筋について、保護者などに伝わるような方向性が示されればよいと思う。

○【第２部 Ⅱ】これまで京都府で先進的に取り組んできた様々な事例があると思う。例えば、英語教育であったり、福祉的な施策であったりである。そういう事例を少し入れることで、目指すべき方向性が伝わりやすくなるのではないか。すべてゼロから始めようとしているのではなく、実績があるということについても伝えられると思う。

○【第２部 Ⅱ】今後の教育の在り方を検討していく上では、学校運営協議会と中退予防といった視点も必要ではないか。今後の地域との連携においては、学校運営協議会が非常に重要になる。また、定時制や通信制課程の現状を見据えると、中退をどのようにフォローしていくのかという観点についても、触れるべきではないか。

◆【第２部 Ⅱ】京都府は南部と北部とで地域事情が大きく異なる。そうした前提要件によった検討が必要である。

○【第２部 Ⅱ １ (1)】見出しにも「探究的な学び」を入れるなど、特色をさらに押し出した方がよいのではないか。また、探究学習に関しては、来年度から高校で本格実施となる新学習指導要領での視点についても、一定触れた方がよいと思う。

○【第２部 Ⅱ １ (2)】国の研究指定であるＷＷＬ事業の取組において、大学教員による特別講義や大学教育の先取り履修の試行や議論が進んでおり、こういったキーワードについても盛り込んでいくべきではないか。

○【第２部 Ⅱ １ (2)】アンケート結果では、基礎的・基本的な学力を身につけるということが、全ての課程・学科において、在籍校に対して期待していることの上位３位に入っており、強化すべき事柄である。基礎学力の習得を促し、生徒が進学や就職それぞれの希望進路を実現するための仕組みを充実させる観点が、これからは必要である。

○【第２部 Ⅱ １ (2)】生徒が地域の一員として、地域課題に一緒に取り組むということについては、高校・特別支援学校の区別なく、地域との関わりを持ち、地域に対して自分ができることについて考えたり、地域の一員としての自覚を持ったりできるような教育が見えて、良い視点であると思った。

○【第２部 Ⅱ １ ⑵ ③】京都府北部地域の一部の市町では、既に府立高校を支援するコーディネーターを配置している。そういった先例を紹介するなど、イメージしやすくするような書き方が必要ではないか。

○【第２部 Ⅱ １ ⑵ ③】これから具体的に計画を立てるということであるが、市町によって配置されているコーディネーターなど、具体的な例示があると分かりやすいと思った。

○【第２部 Ⅱ １ ⑶】教育活動において、部活動についても高校連携という視点が必要ではないか。また、例えばWWＬ事業などでは既に府外の高校との連携も行っており、府内外の高校との連携という視点も必要ではないか。

○【第２部 Ⅱ １ ⑶ ③】「府立高校間での短時間留学」は非常に興味深い内容であり、例示やメリットの記載などがあれば、さらに良いと思う。

○【第２部 Ⅱ １ ⑷】WWＬ事業の取組では、生徒たちが英語によるグループワークや発表を行うなど、既に良い取り組みを実施している。これについても例示として具体的に入れていった方が、分かりやすいイメージになるのではないか。

○【第２部 Ⅱ １ ⑷ ③】国際バカロレアの導入に関して、民間のプログラムを公立の高校に導入することについては、他府県等で分かっている課題などもあるため、そうした課題も考慮しながら検討・検証していく必要がある。

○【第２部 Ⅱ １ ⑸】教員研修の質の向上が挙げられているが、研修のみではなく、例えば大学コンソーシアム京都の高校教員交流会など、教員間の対話や交流を通した資質向上といった視点も重要ではないか。

○【第２部 Ⅱ １ ⑸】多感な世代の生徒たち一人一人が、接する教員の存在によって、「すごい素敵だな」「先生のこの一言で自分は頑張れたな」と影響を受けることも多いかと思う。教員は、ＩＣＴ機器の活用などさまざまな研鑽を積まなければいけないと思うが、精神的な資質の向上についても重要な視点ではないかと思う。

○【第２部 Ⅱ １ ⑸】教員の資質能力の向上については、内容には異論無いが、上位に記載するべきではないかという気がする。「教育は人なり」と言われるように、教員の指導力は、教育の充実を図る上で非常に重要な要素である。

○【第２部 Ⅱ １ ⑸ ③】校長先生の在職期間の長期化は、有意義であると思う。リーダーシップを発揮できる環境については、予算面や人事面での裁量や工夫などがポイントではないかと思った。

○【第２部 Ⅱ １ ⑹ ②】「寮の再整備」や「民間施設の活用」について、具体的なイメージが分かるように記載するべきではないか。

○【第２部 Ⅱ １ ⑹ ③】「環境」というキーワードにおいては、時代・社会・生徒のニーズが多様化しており、それに応えられる教育環境を整えていくということが、喫緊の課題だと思う。多様な生徒のニーズに関して、もう少し具体的に書くことで、その多様なニーズにスポットが当たっていくのではないかと思う。

○【第２部 Ⅱ １ ⑹ ③】「特別な支援を要する生徒など」として、かなり大きなくくりで書かれているが、例えば家庭の経済事情が、進学率や学力、子どもの体験の豊かさなどに影響を及ぼしていると指摘されていることなどといった観点も必要である。生徒の多様性に関しては、生徒が抱える多様な学習ニーズを、もう少し具体的に記入する必要があるのではないか。例えば、貧困家庭の生徒や外国とつながりがある生徒、性的少数者の生徒の問題などにも、視点を当てることが重要ではないか。

○【第２部 Ⅱ １ ⑺】「連携」という部分を重要視していかなければならない。とりわけ、中学校と高校の連携というのが、今後求められていくのではないかと思う。府立高校で何を学ぶか、どのように学ぶかといった情報が中学校に伝わる必要がある。逆に、中学校で何をどのように学んできたのかということを高校の教員が知ることも重要である。小・中学校の教員と高校の教員による授業見学等の相互交流については、重要な視点だと思うが、教職員だけではなく、中学生と高校生の生徒同士の連携・交流についても考えられるのではないか。

○【第２部 Ⅱ １ ⑺】「発信」というのは、重要なキーワードになると思う。府立高校の良さや魅力、凄さといったものを中学生にどう発信するかということも大きな課題であるが、それに加えて、保護者や中学校教員にどのように発信するのか、さらに府立高校の魅力を知ってもらう人々の輪をどう広げていくかということが重要だと思う。地域に開かれた府立高校の姿としても、「地域への発信」という視点が望ましい。

○【第２部 Ⅱ １ ⑻】学校運営協議会の役割が今後重要になると思われる。地域の企業や大学等を交えた委員構成や、学校運営協議会が主催する事業の充実、学校運営協議会間の対話や交流など、地域社会との連携についても触れるべきではないか。

○【第２部 Ⅱ １ ⑻】スクール・ミッションとスクール・ポリシーは、教育委員会の担当部分と学校の担当部分がある。ミッションを作るのは教育委員会で、ポリシーを作るのは学校であり、相互が連携し、検証するなど、ＰＤＣＡサイクルを回すことも大事なのではないかと思った。

◆【第２部 Ⅱ １ ⑻】スクール・ミッションの再定義についてだが、この位置に記載されていることで、学校の情報発信の手段の１つとして位置づけられているような印象にもなってしまう。「使命が組織」をつくるといわれるぐらいで、最初に使命があるべきである。扱いが小さ

く、各論になっているような気がする。今回の在り方ビジョン検討会議は、スクール・ミッションの検討につながっているとも言えるので、構成を変更した方がよいのではないか。

○【第２部 Ⅱ ２ (1)】「魅力ある普通教育」では、インパクトに乏しい印象である。ニューノーマル時代を見据えて、「新しい普通教育の在り方を模索する」といったくらいの言及をしてもよいのではないか。

○【第２部 Ⅱ ２ (1)】普通科に関しては、京都府では、昭和60年の制度改革以降、普通科第Ⅲ類として、体育系や芸術系を設置してきた。その後、類・類型制度というのは解消された経過があるが、そこからまだ継承されている普通科のスポーツ総合専攻や美術・工芸専攻についても、魅力・特色がある。それらについて、何らかの記載があってもよいのではないか。

○【第２部 Ⅱ ２ (1)】普通教育の重要性はこの会議で共通認識したところであるが、例えば「連携」というキーワードによって「連携による新しい普通教育」などと表現することも考えられるのではないか。「魅力ある普通教育」というだけでは、あまり魅力が感じられないというのが正直な印象であり、何かもう少し言葉を強化していくことも重要であると思った。

○【第２部 Ⅱ ２ (2)】職業教育と、職業学科と総合学科という並びは少し違うと思っている。並ぶのではなく、違いがわかるように整理した方がよい。

○【第２部 Ⅱ ３】肢体不自由で中学校の特別支援学級に在籍している中学校３年生が、受験を見据えて、普通学級に移りたいと学校側に相談したところ、教員体制等の事情から難しいといった旨の回答がされたそうである。各学校によって、さまざまな事情や制約もあると思うが、子どもたちの挑戦する力を、保護者や教師といった子どもを取り巻く大人で支えていくような環境づくりが重要であると感じる。

○【第２部 Ⅱ ３ (1) ③】人口減少が著しい地域においては、むしろその実態を逆手に取ることで、ＩＣＴとリアルの双方を重視した新しいスタイルの通信制課程に転換し、全国から訴求される魅力ある高校づくりを展開するのも一案であるとも思う。そうした視点から、もう少し踏み込んで言及してはどうか。

○【第２部 Ⅱ ３ (1) ③】ハイブリッド型の通信制課程は、オンラインの活用等によって、うまく生徒のニーズと合ったものにしていけるのではないかと思った。

○【第２部 Ⅱ ３ (2)】中途退学予防の全国ネットワークなどが既にできていることも鑑み、地元自治体との連携はもとより、全国的なネットワークとも連携して、常に教育政策と福祉政策の役割を意識した情報収集や情報交換、ネットワークの構築に努めるといった視点も必要ではないか。

○【第２部 Ⅱ ３ (3)】インクルーシブ教育の観点で記載されており、誰も取り残さず、共生社

会、多様性に対応した社会を実現することに向けた教育だと感じた。最終的に本当に柔らかな教育に、大人が柔軟に弾力を持って、子どもたちを見守り育み、包み込んでいけるような教育が、目指すべき方向であると思う。

○【第２部 Ⅱ ３ (3)】これまでは個々の子どもに支援をしていたイメージであるが、これからは教育の場や場面に支援をしていくこと、インクルーシブという形での教育を推進していこうと、今大きく学校現場が変わっていこうとしている。しかし、支援員の配置などにおいては、十分な体制を整備できていない現状もある。特別支援学校と高校が連携することで、多様な子どもたちを受け入れていく体制や仕組みをつくることが、今後の大きな課題だと感じている。今後 10 年間の方向性を考えていくには、こうした視点が非常に重要であると思う。

○【第２部 Ⅱ ３ (3)】府立高校と特別支援学校との連携については、良い視点であると思う。特別支援学校においても、地域や社会との繋がりを意識して、生徒が住んでいる地域の人と関わりをもつことは非常に大事である。いろいろな人と関わりを持てるような教育を考えることは大切である。

○【第２部 Ⅱ ３ (3) ②】特別支援学校の教員の府立高校への配置は、必要な視点であると思う。特別支援学校での勤務経験のある教員については、高校現場においても生徒への寄り添い方が細やかだと感じたことがある。特別支援学校での経験が非常に豊かなものだったのだろうと思う。そのような教員の人事交流もうまく活用した、高校と特別支援学校との連携が考えられると思う。

○【第２部 Ⅲ １ ①】「一律的・機械的な基準は設けないことを前提」ということについてはよく理解できる。京都府の場合、北部と南部とで大きく地域の状況が違うが、同じ京都府の生徒であまりに極端な差が生まれるようなことがないようにすることが必要である。全く公平という環境は難しいが、公教育なので、公平性というものを意識した文言がよいと思った。

○【第２部 Ⅲ １ ①】「定時制・通信制課程の再編や再配置を検討する」ことの必然性についてはその通りである。社会の流れが変わってきて、従来の定時制・通信制のイメージ、生徒のニーズが大きく変わってきているという社会的な背景もある中で、この時代の変化に応じた定時制・通信制が必要だというように、その背景や理由が伝わるように工夫するべきではないかと思った。

○【第２部 Ⅲ ２】入学者選抜については、進路指導を行う中学校教員にとってもわかりにくいルールや制度の部分があるので、教員はもちろん、生徒や保護者にもできる限りわかりやすいように検証しなければいけない。単純な制度にはならなくとも、あまりに複雑すぎると、混乱をすることもあるのではないかと思う。

○【第２部 Ⅲ ２】選抜制度については、非常に多様な対応がなされていることで、複雑になっている。中学校教員でも十分に理解できていない場合があり、進路指導主任が担任教員や保護

者に説明をするが、全て理解してもらうところまではなかなか至らない。制度の見直しに向けて検討を行うことはよいと思う。これまでも、生徒や保護者のいろいろなニーズに応えるような形で、見直しをしてきた目的や理由があったのだと思うが、その目的や理由が果たして今の入試制度でうまくいかされているかどうかといった検証が、必要になってきているのではないかと感じる。

○【参考資料】今回のアンケートの回答率が 50%くらいである。今後の実施にあたっては、回収方法を工夫するなど、アンケートの回収率を上げることができれば、もっといろいろな意見が聞けるのではないかと思う。

○【全体】保護者の方からお聞きした、府立高校に対する率直な御意見を紹介したいと思う。

・私学ではできないことである「地方創生」に期待している。
・大学附属の私学に行き内部進学すれば楽だと考える。中学校での進路指導は、併願で公立と私立の２つ受験するよう助言されるなど、やはり安全な道をすすめられる。私学は授業料無償化などで経済的にも選びやすくなっており、親としては私学にやらせたいと思ってしまう。
・北部地域では通える距離にある私学が少なく、選択肢がない。
・私立公立という区別ではなく、合格できそうなところを選んでいる。住んでいる地域によって異なるが、近くに公立があるのに受かりそうにないという不安もある。
・夜間定時制を希望する生徒は減っているが、きめ細やかに指導してくれるので、その役割は必要である。定時制の説明を聞く機会がないことは残念である。夜間の教育活動中に緊急事態になった場合の対応や、学校の施設設備について、食堂へのエアコンの設置、洋式トイレの設置などの改善についても検討してほしい。
・学校によっては、Classi を導入しているがあまり活用されていないこともある。教員には、そうした指導力も必要ではないか。スマホの持ち込みは禁止されているが、調べ学習などでの活用ができるので、持ち込みの許可について積極的に考えてほしい。
・特別支援学校では、新型コロナウイルス感染症に対するリスクが非常に高い中、子どもたちも頑張っている。高等部の就労に向けたスキルを身につける取組はありがたいが、就労に関する学習時間が学校生活で占める割合が多い印象である。同年代や他校生との関わりなど、内面を表現する力やストレスを発散する力などが身につく取組の充実も必要ではないか。障害のある生徒の指導を理解している教員の充実や、専門性の向上が重要であり、教員・保護者・生徒の相互理解をもっと深める必要がある。肢体不自由な生徒に対応した、段差の解消など、施設設備面での改善も必要である。

○【全体】府立高校の在り方ジョンが作成されることで、保護者の声など、幅広く意見ができる機会となることは、非常に良いことであると思う。

○【全体】「市町村」という言葉と「自治体」という言葉が混在している。どちらかに統一した方がよいのではないか。

○【全体】第１部は６つの柱で整理されているが、第２部は大きく３つの柱で 15 の項目があり、少し見にくいという印象を持った。項目の順番も含めて、整理をしてはどうか。

◆【全体】記載する項目の順番・構成については、非常に重要だと思う。その辺りについても、再度検討していただきたい。

□素案に対して本日いただいた意見などを参考にして、中間案を確定させていきたい。中間案については、府議会や教育委員会に報告をする。12 月から来年１月にかけて、パブリックコメントということで、府民の皆様からも御意見をいただきたいと思っている。次回１月に開催予定の第８回検討会議において、そのパブリックコメントでいただいた意見を委員の皆様に紹介し、改めてこの中間案を最終案に向けてどのように修正していくべきかという点について、意見をいただくこととしたい。

◆今後の中間案の確定に関しては、座長と事務局において相談の上、進めることとさせていただく。（異議なし）